

数研 AGORA

▶ 高等学校新学習指導要領(地理歴史)の要点 …… 1

▶ 世界と日本のおもなできごと(2009.9~2010.9) / 数研出版編集部 …… 6

No.54

この用紙は、再生紙を使用しています。

高等学校新学習指導要領(地理歴史)の要点

2013年4月より、新しい「高等学校学習指導要領」のもとで授業が行われます。(数学・理科は2012年4月より先行実施)今号では、「地理歴史」6科目の特徴について特集いたします。

(「公民」3科目については『AGORA』53号に掲載しております)

地理歴史科の科目編成

教科	科目	標準 単位数	すべての生徒に 履修させる科目
地理 歴史	世界史 A	2	「世界史 A」, 「世界史 B」 から 1 科目, 「日本史 A」, 「日本史 B」, 「地理 A」, 「地理 B」 から 1 科目の 合計 2 科目・4 単位以上
	世界史 B	4	
	日本史 A	2	
	日本史 B	4	
	地理 A	2	
	地理 B	4	

地理歴史科の目標

我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う。

世界史 A

今回の改訂の趣旨は、「地図、年表、資料などを活用し、地理的条件や日本の歴史との関連に一層留意しながら、諸文明の特質と現代世界の形成過程を理解させるとともに、人類の諸課題を追究する学習などを通して、現代世界に関する認識を深め、歴史的思考力を培うようにする」こととされ、次の4点が改訂の要点として示されています。

1点目は、導入時期の学習として「(1) 世界史へのいざない」が新設され、地理と歴史への関心を高

め、世界史学習の意義に気付かせることが目指されている点です。この大項目では、自然環境と歴史、日本の歴史と世界の歴史のつながりに関わる適切な主題を設定し、考察する活動を通して地理的条件や日本の歴史と関連付けることに留意するとされ、中学校社会科との連続性に配慮するとともに、世界史学習の基本的技能に触れさせることをねらい、「地図や写真などを読み取る活動」や「年表や地図などに表す活動」を取り入れることが求められています。

2点目は、前回の改訂では、前近代、近代、現代の歴史にそれぞれ配置されていた三つの大項目が、科目の導入としての「(1) 世界史へのいざない」、前近代と近代を合わせた「(2) 世界の一体化と日本」、19世紀後期以降の世界を扱う「(3) 地球社会と日本」の三つの大項目に再構成されている点です。前近代と近代の歴史が一つの大項目にまとめられたことで、近現代史中心、とりわけ現代史が一層重視される構成になったことは注目されます。

3点目は、知識基盤社会と言われる今日の社会の構造的変化に対応していくための思考力・判断力・表現力等に関わる能力として求められている、資料の活用能力の育成が重視されている点です。このことに関連して、地図を活用した学習が、地理ばかりでなく歴史の授業においても重要な活動として位置付けられています。年表、地図その他諸資料を活用して具体的に学ばせる工夫がより求められており、諸資料に基づく学習が一層重視された内容構成とな

っている点を十分に意識しなければなりません。

4点目は、主題を設定させ、探究する活動を充実させることが挙げられている点です。内容の(3)に「オ 持続可能な社会への展望」が設けられましたが、この中項目は、今回の改訂において、言語活動の充実を図ることが重要な改善の柱の一つとして位置付けられたことに対応しています。ここでは、生徒自身が19世紀後期以降の世界に関して学んだ事項を参考にして、現代世界の特質や課題に関わる主題を設定し、世界史学習で身に付けた知識や技能を活用しながら探究し、世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現を展望させることをねらいとしています。生徒の主体的な活動を促すためには、作業的、体験的な学習を導入するなど学習活動を工夫することが必要で、各種の情報・資料の収集と、活用、論述、発表、討論など多様な活動を取り入れることが考えられます。そのためにも、適切な時間を確保し、諸資料の整備に十分配慮しなければなりません。歴史を考察するための基本的な方法としては、文化遺産、博物館や資料館のほか、史跡、景観などの活用も積極的に行うことが効果的です。

世界史 B

今回の改訂の趣旨は、「地図、年表、資料などを活用し、諸地域の地理的条件や日本の歴史との関連に留意しながら、世界の歴史の大きな枠組みと流れを理解させ、文化の多様性・複合性に関する認識を深めさせるとともに、適切な主題を設定して追究する学習を一層重視して、世界史の学び方や歴史的思考力を培うようにする」こととされ、次の3点が改訂の要点として示されています。

1点目は、地理的条件や日本の歴史との関連付けに配慮する内容構成が求められ、世界史の導入時期に、中学校社会科との連続性と地理的条件や日本の歴史とに配慮する項目を置いて、中学校社会科との円滑な接続を図るとした点です。そのため、「(1) 世界史への扉」では、従来からの、「日本の歴史と世界の歴史のつながり」、「日常生活にみる世界の歴史」という二つの中項目とともに、「自然環境と人類のかかわり」が中項目として新設されました。また、現行は、これら中項目の中から適宜選択し二つ程度主題を設定するとされていましたが、今回の改訂では、三つの中項目からそれぞれ主題を設定するとされた点も大きな変化です。導入時期の学習を通

じて、地理と歴史への関心を高めるとともに、世界史学習の意義に気付かせることが重要です。

2点目は、日本国民にとっての世界史という観点から、世界史の全体を通じて日本の位置付けに着目させる構成が重視されている点です。「(2) 諸地域世界の形成」には、日本を含む東アジア世界の形成過程を把握させる中項目が、「(4) 諸地域世界の結合と変容」には、それぞれの時期での日本の動向を世界の歴史の中に明確に位置付ける中項目が盛り込まれています。また、内容の(5)に新設された「オ 資料を活用して探究する地球世界の課題」では、日本の歴史を世界史的な視点から取り上げ、日本の歴史を世界の歴史の中で動的、構造的にとらえさせることが求められています。

3点目は、思考力・判断力・表現力等の育成が重視され、主題を設定して行う学習が、すべての大項目に置かれたことです。まず、内容の(1)では、考察する活動を設けて、教師が主題を設定し考察の過程を指導することとし、内容の(2)の「エ 時間軸からみる諸地域世界」、内容の(3)の「エ 空間軸からみる諸地域世界」においては、世界史を時間的つながりや空間的つながりにそれぞれ着目して整理し表現する技能を、また内容の(4)の「オ 資料からよみとく世界の歴史」においては、資料を多面的・多角的に考察し読み解く技能を習得させることが目指されています。作業的、体験的な学習活動を取り入れることで学習に主体的に参加させ、歴史的な考察方法を習得させるとともに、歴史的思考力を培わせることが重要です。さらに、内容の(5)の「オ 資料を活用して探究する地球世界の課題」では、適切な主題を生徒に設定させ、資料を用いて探究する活動を設けることで、資料を活用し表現する技能を習得させるとともに、これからの世界と日本の在り方や、世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現について展望させることが求められています。ここでは、「世界史 B」の学習のまとめであることから、これまでの学習で習得した知識や技能を有効に活用すること、調査や見学、報告や討論など多様な学習活動を取り入れることも重要です。

(京都府立朱雀高等学校教諭 高田 法彦)

日本史 A

この科目は、近現代の歴史を学ぶ点には変更はありませんが、地理歴史科の改善の具体的事項として「地図を活用した学習」を一層重視するとあり、さらに、目標には「地理的条件」と関連させながら、近現代の歴史や現代社会の成り立ちを理解させるとあります。この「地理的条件」の文言は、日本史 B、世界史 A・B の目標にも見られます。今回の改訂でも現行と同様に、世界史 A または B が必修科目であるので、中学 1 年や 2 年で地理学習を終えてしまう生徒も少なからずいることになります。そのため、地理歴史科では、科目に関わらず時間軸と空間軸による総合的な理解をさせることが必要であると考えます。今回の改訂では、世界史、日本史、地理それぞれの科目相互の関連を重視した内容構成が図られており、教員には日本史だけでなく、世界史とりわけ地理を踏まえた授業構成が求められるでしょう。それによって歴史科目の幅を一層広げ、ダイナミックな授業展開を行うことが肝要ではないでしょうか。

さて、今回の学習指導要領解説を見ますと、現行のもの、さらに前のものと比較しても、改訂の要点の記述はおよそ 10 倍の分量となっています。これは、改訂の趣旨や要点を細かに説明することで、指導の徹底をはかろうとするものであると思われる。

日本史 A の改訂の趣旨には、先に触れた地理的条件や世界の歴史と関連させることで、課題学習を重視し、近現代の歴史や現代社会の成り立ちを理解させ、歴史的思考力を培うようにするとあります。

改訂の要点は 2 点あります。第 1 は、「歴史を考察し表現する学習の重視」です。この表現する学習は、教科全体の改善の具体的事項でも「内容を説明したり自分の考えを論述したりすることを通して」とあり、言語活動の充実という改訂全体の中で重視されていることです。学んで得たことをより主体的に自らの言葉で話したり、文章化の作業を通して、考察した内容の曖昧な点を見出したり、理解した内容を他者に伝えることでより知識が確実なものとなっていきます。発表授業はそれぞれの課題を見出すことにはじまり、調べ学習、プレゼンテーション、レジュメ作成など時間はかかるものの、生徒が主体的に動くことで自ら学ぶという効果を上げられるものと思います。さらに、この科目の導入として「(1)

私たちの時代と歴史」という大項目が新設されました。これは、現行の「(1) 歴史と生活」を指導計画の中で明確に位置付けることで、より実効あるものとし、歴史に対する関心や課題意識を高め、歴史を学ぶ意義に気付かせることがねらいとされています。学年の初めにどのようなことを学ぶのか、期待や不安を抱えている生徒に対して周到な教材研究が求められるところです。学習指導要領解説では、現行の衣食住の変化や交通・通信の変化などのほかに、現代的諸課題として「人権、環境、情報、国際理解」や、生徒が興味関心を持ちやすい社会的事象を取り上げるとあります。例えば、人権問題では第二次世界大戦前後の比較を行ったり、環境問題では環境への企業の取り組みについて高度成長期と現代の変化を調べたりするのもよいでしょう。また、内容の(2)と(3)には、それぞれ「ウ 近代の探究」、「ウ 現代からの探究」が新設され、「ウ 現代からの探究」は、この科目のまとめとして位置付けられています。事例として挙げられている食糧事情の変化、個人の空間意識の変化なども興味深い主題と言えるでしょう。食糧問題では食料自給率の低下と関連させて、主要な食料の輸入相手国を地図化したり、食事の材料の産地を地図化したりするなど、地理的視点を加えるのも一つの方法でしょう。

第 2 は、「近代の大観的な学習の重視と項目の再構成」です。大観的な学習を重視する立場から、大項目の再構成が行われ、政治的な視点、経済的な視点というように考察する視点が明確にされ、近代の特色を大きくとらえることができるように内容の精選や項目の再構成が図られています。

日本史 B

改訂の趣旨には、様々な資料の活用を重視するとあります。歴史資料には、文字や絵画など様々なものがあり、資料に基づいて歴史の叙述がなされています。また、南北朝期のように政治的立場が異なれば一つの事象でも全く反対の見方が生まれます。これらについては、以下で言及します。

改訂の要点としては 3 点が示されています。第 1 は、「歴史を考察し表現する学習の重視」です。内容の(1)の中項目「ア 歴史と資料」は、科目の導入として位置付けられており、これから学習する歴史が文字資料だけでなく遺跡、遺物、伝承、習俗、地名、言語など様々な資料を駆使して叙述されている

ことに気付かせるわけです。地名は行政名だけではなく、公立学校、特に小学校の名称や、バス停留所、橋の名称などに近代以降の地域の発展を物語るものが見出せることがあります。これらは、身近な地域をフィールドとした調査の際に、観察の対象として有効だと思われます。「ア 歴史の解釈」は、内容の(2)「中世の日本と東アジア」の中項目であり、学習指導要領解説では、例として荘園絵図や地図資料の利用が挙げられています。例えば、日根野荘の絵図、九条政基の『政基公旅引付』、現代の地形図を利用した学習を通して、現代の景観から過去を復元し、また守護の押領に対処する公家の姿を通して、「地域社会における武家勢力の伸張」を考察するのも一つの方法でしょう。内容の(3)の「ア 歴史の説明」では、様々な角度から歴史事象を解釈する姿勢を身に付けさせるわけですが、そのためにはしっかりとした根拠と論理が求められます。説明する能力を身に付ける点は、言語活動の充実にも結び付くところでしょう。学習指導要領解説では、田沼意次に対する評価が例として挙げられています。田沼の政治は、江戸時代の金権政治の代表のように扱われ、説明資料もそのようなものが多く使われてきましたが、近年、別の解釈も紹介されています。定説と言われてきた歴史事象でも新たな資料の理解によって、違った側面が見られることを学ぶ一例でしょう。内容の(6)の「ウ 歴史の論述」は、科目のまとめとして位置付けられています。言語活動の充実をはかるといふ趣旨を踏まえ、生徒一人一人が興味を持った歴史事象について主題を設定して、小論文などの形式でまとめて、日本史学習の成果として冊子にするのもよいでしょう。

第2は、「近現代の学習の重視と項目の再構成」です。近現代の学習を重視することから、近世以前の内容が再構成されたわけです。これには、原始・古代から丁寧に学習を積み重ねることで、現代を生きる生徒にとって重要な近現代の学習時間が、学年末になって十分確保できないことになり、駆け足で終わってしまうことのないようにするという意図も見えるのではないのでしょうか。

第3は、「歴史の総合的な考察の重視」です。生徒が細かな歴史事象の記憶に陥らないように、各時代の特色を大観的に理解し、現代に結び付く視点を身に付けられるような指導の工夫が必要です。

(豊島岡女子学園中学高等学校講師 山本 実)

地理 A

今回の改訂では、内容的には現行の学習指導要領からあまり変更が無いようにも見受けられますが、配列に関してはかなり変更が図られています。現行の学習指導要領では「(1) 現代世界の特色と地理的技能」と「(2) 地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題」の二つの大項目から構成されていたものが、新しい学習指導要領では「(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察」と「(2) 生活圏の諸課題の地理的考察」に整理されています。これは単に単元の学習順序を組み直しただけではなく、地理Aで学ぶべき学習内容について再検討を行い、より良い授業展開が行われるように配慮した結果といえるでしょう。

科目全体を通しての構成としては、まず大項目(1)で地球規模の諸課題について学んだ後に、大項目(2)で生活圏の諸課題について地理的に考察するという流れになっています。つまり、グローバルスケールからローカルスケールへと学習を進め、最後に置かれた中項目「ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査」で、地域調査などの生徒の主体的探究的な活動を通して、地理的な技能や見方や考え方を完成させるという展開が想定されているのです。

また、従前から地理Aと地理Bの性格の違いが必ずしも明瞭でないと指摘されてきました。そこで今回の改訂では、地理Aは日常生活との関連を重視することに重点が置かれています。大項目(1)の「ア 地球儀や地図からとらえる現代世界」や大項目(2)の「ア 日常生活と結びついた地図」で身の回りにある地図を取り上げたり、大項目(2)の「イ 自然環境と防災」で生徒たちの身の回りの安全について考察させたりするなど、随所に日常生活との関連を意識した内容が盛り込まれています。

先にも指摘しましたように、地理Aの学習の最後に位置付けられている中項目「ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査」は、生徒の生活圏内で地域調査を実施させ、探究的な活動を行う場面として設定されています。これは学校教育における「地理」学習の最終段階として位置づけられており、地理Aの(年間の)学習計画を立てるにあたっては、この中項目の学習に向かって収斂していくよう、他の項目の学習内容をあらかじめ整理して位置付けておく工夫が求められています。この部分の学習のイメージをとらえるには、「学習指導要領解説 地理歴

史編」で提示されている、「学習指導の展開例〈中心商店街の衰退〉を扱った地域調査の事例」(94ページ)が参考になるでしょう。

地理 B

今回の改訂は地理 A 同様に地理 B においても、一見ただけでは内容の配置換えを行っただけ、と見られてしまうかもしれません。しかし、現行の学習指導要領の大項目と、新しい学習指導要領の大項目を比較すると、改訂の趣旨が読み取れると思います。現行では(1)系統地理→(2)地誌→(3)現代世界の諸課題となっていた大項目の構成が、(1)地図・地理的技能→(2)系統地理→(3)地誌と改訂されています。(1)(2)の学習を踏まえて地誌学習を行い、地域を学ぶことを通して世界像をとらえさせようというねらいなのです。

今回の改訂で地誌学習の重視について注目が集まっていますが、もちろん知識偏重の網羅的世界学習を目指しているものではありません。それでは、どのような地誌学習を進めようとしているのでしょうか。それを示しているのが大項目(3)の中項目、ア・イ・ウそれぞれだと言えるでしょう。

「ア 現代世界の地域区分」では、地域区分そのものを学ばせます。複数の地域区分の方法を取り上げ、それらの比較・検討を通して地域概念を理解させたり、地域区分の意義や有用性に気付かせます。つまり世界の地域を固定的に区分するのではなく、その多様性を柔軟にとらえる視点を育むのです。

「イ 現代世界の諸地域」は、まさに世界地誌そのものを学ぶ項目なのですが、ここで重点が置かれているのは、“どこを学ばせるのか?”よりも、“どのようにして地域を理解させるのか?”ということです。先の中項目で学んだ複数の地域区分の方法を踏まえて、取り上げる地域を設定することになります。そこでは、一つの地域区分の方法を使って複数の地域を取り上げることもできるし、複数の地域区分の方法それぞれによって、取り上げる地域を選ぶこともできます。この取り上げる地域の設定にあたっては、地域的内容的な偏りがないように配慮するだけではなく、地誌的な考察方法を身に付けさせるのにふさわしい地域であるか、についても検討しなければなりません。また、地誌的な考察方法についても、いわゆる静態地誌、動態地誌、比較地誌など様々なとらえ方を扱い、身に付けさせるよう工夫す

る必要があります。これについては、「学習指導要領解説 地理歴史編」の114~115ページに具体的な学習イメージが例示されているので、参考になるでしょう。

「ウ 現代世界と日本」は、今回の改訂で新設の中項目です。「内容の取扱い」にも明記されているように、この科目のまとめとして位置づけられています。従来高校地理では、踏み込んで扱われる場面が決して多くはなかった日本(地誌)について、その将来までも見据えて真正面から生徒自身に考えさせようとする項目です。そのねらいとしては、生徒に主体的・探究的な学習を行わせるとともに、社会参画への態度をも育もうとしているのです。ぜひとも、「時間切れでできなかった」となってしまわないよう、(年間の)学習計画を工夫していただきたいものです。ここでの具体的な学習イメージとしては、「学習指導要領解説 地理歴史編」の116~117ページに、「大都市への人口集中にかかわる課題」を扱った事例として例示されています。これを参考に、各指導者が生徒の実態に即した授業展開を工夫することで、「地理を学んで良かった」と言ってくれる生徒が増えることを期待します。

最後に、地理 A・地理 B を通じて、今回の改訂に関わって配慮すべき点について触れておきます。

1つ目は、探究的な学習のあり方についてです。学習の過程において、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現、という段階を経ることにとどまらず、その先に次の課題設定へとつながる継続的な螺旋状の学びこそが、探究的な学習なのです。詳細については、「高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」の71~75ページを参照してください。このようにとらえると、地域調査や地誌的な学習において、同一の地域を小・中・高校と繰り返し取り上げることの意義がはっきりするでしょう。

2つ目は、中学校社会科地理的分野との連繋についてです。今回の改訂で中学校社会科の内容は大きく変更されました。時間数が増加したことによる内容の充実だけではなく、地理的分野での日本地誌、世界地誌の取り扱いも大きく変わっています。ぜひ新旧対照表などを活用して、中学校社会科で生徒が学んできた内容についても、機会を見つけて研修を深めるようつとめたいものです。

(学習指導要領解説作成協力者 齋藤 清嗣)